



形が残る仕事は達成感が生まれやすい。仕上がったものが目の前にあるので、次もがんばろうという気持ちになる。その繰り返しの連続だと日本乾溜工業(株)の大石淳一さんは語る。現場監督として作業の安全面や工程の気配りは大事だが、それ以外にも人材育成、新しい技術の学びも期待されている。今後の仕事に対する考え方や思いなどを伺った。

●この職業を選んだきっかけ

ものづくりが好きだったので、何か形が残る仕事をしたかったのが理由です。大学は関西の工業系へ行きましたが、卒業後は地元に戻りたいと考えていました。そのとき日本乾溜工業が大学に求人を出していて、九州各地に支店や営業所もあり、応募したのがきっかけです。

●職場の魅力や責務

自分が関わった工事が、誰かの役に立ち、暮らしを豊かにするのを見ると、「次もがんばろう」とモチベーションは高まります。とくに佐賀県を代表するような仕事に携わったのも、今の自分を形成しているのかもしれない。佐賀空港、総合運動場、三瀬ループ橋など、どれも思い出深いものがあります。

佐賀空港は入社して数年後に任された工事です。年齢が一番若いのに、先輩方を差し置いて指示することに戸惑っていました。そのときに「主導権はお前だよ。指示してくれないとみんなが迷う」と言われ、現場監督の全体を見る力と、伝える力の難しさを早い段階で学んだのは収穫です。

●仕事のこだわり、ポリシー

交通安全の工事ですが、法面の仕事は、高い場所で作業します。危険を伴いますので風の強弱や向きなど、天気には人一倍気をつけています。

また、情報共有なども大事にしています。経験値は高くなりましたが、それでも知らないことがあります。たとえば、佐賀県では当たり前のことが、鹿児島県だったら別の方法を行っているなど。同じ作業でも工事班が地元かそうでないかによって、使っている機械も方法も違う場合があります。固定観念を持たず、新しい情報を調べて、経験豊富な先輩に聞くなど、解決の糸口を探ることが大事だと思っています。

担い手シリーズ 10

地域を代表する 仕事に携われたことが 自身の成長を生んだ

大石 淳一 入社24年目(工事統括部 係長)
日本乾溜工業 株式会社



●仕事上で印象的なエピソード

過酷さで覚えているのは、ある法面の現場です。雨が降ると沢になる場所があり、そこに布製型枠を施工する仕事でした。軽トラがやっと通る道を進み、それが終わったら現地まで登って行きます。工事を請け負った年は、台風が3回も直撃し、周辺樹木の伐採が終わったと思ったら、週明けには倒木が現場に何本もあり、言葉になりませんでした。毎週ごとに沢の形状が変わっていて、気持ちが悪えたのを鮮明に記憶しています。バックホーなど持ち込むことはできず、すべてが人力。半年工期の仕事でしたが、終わった直後は安堵感しか残りませんでした。今の体力では、あの現場に行けないかもしれません。

●今後の目標

人材育成など数え上げたらきりがありません。それと同時に機械の知識など、最新情報についても学んでおかなければと思っています。たとえば、飛躍的に進歩しているドローン測量などがそのひとつ。ドローン撮影は精度も上がり、正確なデータ収集も期待できます。

使う現場は限られていますが、使わないからではなく、いつでも対応できるように準備しておく。そのためにも、社内外の人脈ネットワークを強化していきたいと思っています。



大石淳一(おおいしじゅんいち)
長崎県出身。大阪産業大学 土木工学科入学・卒業。平成8年4月日本乾溜工業(株)入社。

会社情報
812-0054 福岡市東区馬出 1-11-11
TEL:092-632-1050/ FAX:092-632-1082
<http://www.kanryu.co.jp/>